Project	地域協働専攻　地域政策グループ
15	**七飯大沼清掃・美化お手伝いプロジェクト2022**
メンバー	[学　　生]　中村　栞 / 鳥毛　真歩 / 山田　侑芽 / 西山　真央 / 金澤　陸玖 / 太田　陸斗/ 田頭　昴大 / 石田　翔大 / 石川　凪沙
	[担当教員]　淺木　洋祐

【背景】

函館市のとなりの七飯町にある大沼国定公園は、道南地域でも有数の魅力あふれる観光地である。しかし、人気がある観光地のため、ポイ捨てゴミなどの問題が存在する。さらに、近年では新型コロナウイルス感染症拡大の影響があり、観光客の減少によって苦しい状況にある。

【目的】

本プロジェクトではポイ捨てゴミの問題などにとりくみ、大沼国定公園の魅力と訪れる観光客の満足度を高めることを目指した。また、活動を通して参加学生が大沼の魅力に触れ、その良さを理解することにも努める。本活動を通して、大沼の活性化を応援することがプロジェクトの最終的な目標である。

【概要】

七飯大沼国際観光コンベンション協会（以下、大沼観光協会）と連携して、大沼での清掃・美化活動を中心に、大沼の活性化のための活動を積極的に推進する。

【プロセスと成果】

前期の4、5月は、学生・教員のミーティングに加えて、大沼観光協会の方にも参加してもらってミーティングを行い、活動内容を検討した。6、7月に①大沼での清掃・美化活動、②大沼の魅力向上のための提言の作成、③大沼湖水祭りのボランティア活動を行った。

①大沼での清掃・美化活動では、2班に分かれて大沼の湖畔道路を中心にポイ捨てゴミを回収した。

②大沼の魅力向上のための提言の作成では、大沼の魅力を学生が理解するために、実際に大沼を散策して、その魅力を向上するための提言を検討した。

③大沼湖水祭りでのボランティアでは、新型コロナウイルス感染症の問題から、3年ぶりの開催となった祭りのボランティアとして学生が参加した。

後期の活動は、④大沼周辺の清掃・美化活動、⑤大沼の魅力向上のための提言の作成の2つを行った。

④大沼周辺の清掃・美化活動では、ゴミが多くて掃除が間に合わないと北海道開発局函館開発建設部から聞いていた大沼近くの駐車場で清掃活動を行った。

⑤大沼の魅力向上のための提言の作成では、前期に引き続き、学生による大沼散策を行った。

【湖水祭りのボランティアをしている様子】

【総括と反省・今後の課題】

初めて実施した地域プロジェクトであり、新型コロナウイルス感染症の影響下で実施したことを考慮すれば、まずまずの活動内容になったと考える。

反省・課題は下記の3点である。

（1）新型コロナウイルスの感染拡大の影響

感染に配慮した活動となるため、大沼までの移動や、現地での活動に制約が大きかった。感染症の問題がなければ、もっと有効な活動ができたことが悔やまれる。

（2）学生間のモチベーションの相違

プロジェクト型学習などのグループ活動に発生しがちな問題だが、途中から一部の学生にやる気のなさが顕著になり、協力してプロジェクトを遂行することが難しかった。

（3）初年度ゆえの経験のなさ

初めてプロジェクトを実施したため、実際の活動内容や活動時間などに戸惑うことが多かった。特に上記（1）の問題もあったため、思ったような活動が十分にできなかったことは残念であった。

【大沼近くの駐車場での清掃・美化活動の様子】

【地域からの評価】

大沼観光協会の方々は活動に協力的であり、Zoomによるミーティングでもさまざまな提案をしてくれ、実際の清掃活動でも一緒に活動するなどしてくれた。

しかしながら、多様な活動提案をしてもらったにも関わらず、新型コロナウイルス感染症の問題などから、十分に本プロジェクトでは取り上げることができなかった。

この点はやむを得なかった事情があるとはいえ、プロジェクトとして残念な点であり、当初想定していたような十分な地域貢献がプロジェクトでは果たせなかったと考えている。

【年間スケジュール】

■前期

4、5月　活動計画の策定

6、7月　大沼での活動

7月　　中間発表会

■後期

10月　大沼で活動

（※冬季は新型コロナウイルス感染症の問題を考慮して活動は自粛した）

1月　成果発表会

Project	地域協働専攻　地域政策グループ
16	**子どもを対象にした法教育プロジェクト**
メンバー	［学　　生］ 荒谷　泰聡 / 泉山　優花 / 藤江　あかり / 伊藤　達也 / 笠井　祐弥 / 小山田　早希 / 鎌田　帆南 / 戸川　翔真 / 中村　叶人 / 安齋　和輝
	［担当教員］ 伊藤　泰 / 金　鉉善

【背景】

近年は新型コロナウイルス感染症によって移動が制限されていたものの、最近はその制限が緩和され始めている。しかし地域間や国間での人の行き来が活発化する際に、両方の人が気持ちよく生活できるための「ルール」が必要になる。

【目的】

「ルール」が重要となる社会において、子どもたちにルールについて自ら興味や関心を持って接する姿勢を身につけてもらい、「法が我々と密接に関わっている」ということを知ってもらうために活動している。そのため、我々は子どもに親しみやすい「人形劇」にクイズを取り入れて、子どもに法について少しでも理解や親しみを持ってもらう。

【概要】

「子どもに法教育を行う」という趣旨のもと、まずは人形劇を行う我々がその法について学習し、理解をするところから始まる。その後は具体的な法律を用いた内容のシナリオの作成を行い、完成後はそのシナリオをもとに担当分けや小物づくり、そして練習を行う。そして最後は函館蔦屋書店の協力を得て、キッズスペースにて参加型の人形劇を実施し、子どもの法への理解を高めてもらう事を試みた。

【プロセスと成果】

前期は、まず金先生のご協力のもと我々が「そもそも法とは何か、法教育を行う際にどんなことが重要か」などといった必要不可欠な知識を教えていただいた。その後は3年生の前年度プロジェクト担当に、「人形劇を行う際のポイント」を教えていただくために、前年度に作成した台本を用いて今年度プロジェクト担当者全員と有志の前年度プロジェクト担当者合同で人形劇の練習を行った。そして6月にはその練習内容をもとに有志の前年度プロジェクト担当者と合同で一回目となる人形劇の披露を蔦屋書店のキッズスペースで実施した。

前期の成果は、本番を通して様々な改善点を見つけることができたということである。有志の前年度プロジェクト担当者からは練習の際に「人形の顔は上を向きすぎないように」といったことや、「人形の動きのメリハリ」、「話すスピードの遅さ」といったことを教えていただいたが、最初のころは意識しても全てを完璧にするのは難しく、前年度プロジェクト担当者と比べて見劣りしていた。しかし、練習を通じて完成度が上がっていき、本番の前には完璧とはいかずとも前年度プロジェクト担当者と比べても見劣りしなくなった。また、今年度のプロジェクト担当者にとって初めての本番である前述の蔦屋書店での人形劇の披露ではたくさんの子ども連れの方々に来ていただき、たくさんの子ども達の反応を確認しながら進めることができた。劇の終了後には子どもや保護者の方々から「楽しかった」、「また聞きたい」などといった評価をもらい、後期への自信にも繋がった。劇の翌週には今年度のプロジェクト担当者で反省会を行い、「音声はどうだったか」や「人形の動きはどうであったか」、「子どもの反応・聞いている態度はどうだったのか」など、後期の台本作りや練習に向けて課題や良かった点を洗い出した。

そして後期からは前年度の台本ではなく、今年度のプロジェクトメンバーのみで一から台本を作成することになった。最初は小学校でも劇を行う計画であったため、2つのグループに分かれてそれぞれ台本を作る予定であったが、先生の助言を受けて台本は統一することにした。その後、先生のアドバイスを得ながら子どもにも関連性の高い「落とし物」について劇を行うことに決定した。台本作成が終わった後はすぐに財布や背景などの小道具を作成し、劇で演者の担当となった人は短い時間の中で日程を調整し練習を行った。前期と比較しての練習期間は短かったが前回の発表の反省点を改善したため、完成度は前期よりも向上していった。2回目の人形劇の発表も蔦屋書店のキッズスペースを使わせていただいた。本番では事前の呼び込みに力を入れたことにより、前回より多くの集客があった。また、前回の発表と異なりマイクを使用しなかったことで、子どもたちに話を聞き取ることに集中させることができた。

後期の発表では、台本作成の遅延による練習時間や劇に使う小物の作成の短さなど新たな課題が発生し

た。また、人形の細かい動きやしゃべるスピードにも課題が少し残ってしまったため、これらのことは次の代にもしっかりと伝えておきたい。しかし、子どもの参加率や反応はとても良く、先生方からも高評価であった。加えて、子ども達も前期と比較してより集中して劇を見ていたため、子どもたちに法に興味を持ってもらうための劇としては成功できたのではないかと考える。

【人形劇の練習の様子】

【劇の小道具を制作している様子】

【総括と反省・今後の課題】

前期は前年度からのシナリオや小道具等の引継ぎをスムーズに行い、前期のうちに一度人形劇を発表する機会を設けることができた。また、前年度の担当者から演技指導を受ける事で、初回の発表からクオリティの高い内容となった。後期は前期の活動から得た気づきを基に、シナリオや小道具等の制作を今年度のメンバーのみで一から行った。前期よりシナリオが出来上がった状態での練習期間は短かったが、人形劇発表の際に子どもたちから前期より多くの反応をもらうことができた。また、活動全体を通して、目的である子どもに法について少しでも理解や親しみを持ってもらうことが、劇中の問いかけに対する子どもたちの反応の良さからできているように感じた。加えて、法律やルールと直接的に関係する事ではないが、人形劇を始める前に集まった子どもたちと交流し演者との距離を縮めることによって子どもたちの劇への集中力を高め、プロジェクトをさらに効果的なものにすることができた。

今後の課題としては、人形劇のシナリオが小学生以上の子どもには簡単すぎることが挙げられる。当初、本プロジェクトでは小学校での実演も視野に入れていたため、来年度もそのような計画がなされることが想定される。しかし、現在のシナリオでは分かりやすくすることに重きを置いているため、小学生以上の子どもでは飽きてしまうように思われる。前年度のシナリオも含め、現在のシナリオのストックは比較的未就学児向けであるため、来年度以降シナリオ作成をする場合は今年度までと異なった年齢層へ向けたシナリオから取り掛かることが望まれるだろう。また、一から新しいシナリオを作成しない場合には、現在あるシナリオの言い回しを小学生以上の子どもに向けたものに再調整することで、時間をかけずにこのような課題を解決できるのではないかと思われる。

【地域からの評価】

前期の活動では、前年度までのプロジェクト担当者が築き上げた蔦屋書店との信頼関係や人形劇の実績等により今年度のプロジェクトがスムーズに進行している状態であった。

後期の活動では、前期の人形劇の発表で今年度のプロジェクト担当者にも知識だけでなく自信が付いたことによって、今年度のプロジェクト担当者が中心となりプロジェクトを進行することができた。

人形劇を上演するまでの呼び込みや子どもたちとの交流、上演後の保護者との交流などを通して、「子どもが楽しめる良い劇だった。」、「友だちと劇の内容について話していた。」などという感想や意見をいただいた。

【年間スケジュール】

■前期

5月17日　法教育のレクチャー
5月18日～ 6月18日　劇の練習
6月19日　人形劇の発表

■後期

10月 7日～11月15日　シナリオ作成
11月16日～12月 9日　劇の練習、小道具作成
12月10日　人形劇の発表

Project 17	地域協働専攻　地域政策グループ
	『財政教育プログラム』協働推進プロジェクト with 函館財務事務所
メンバー	［学　　生］ 上村　豪 / 花田　莉乃亜 / 石澤　優眞 / 柿崎　拓夢 / 高橋　瑠菜 / 伊藤　颯汰 / 菊地　卓斗
	［担当教員］ 奥平　理

【背景】

財務省函館財務事務所から、これまで取り組んできた「財政教育プログラム」をより効果的で、よりよい授業とするための教材や授業の進め方、グループワークの方法などを検討するため、協働できないかとの依頼があり、このプロジェクトがスタートした。

【目的】

若年層に日本の財政に興味を持ってもらい、日本の将来について考えてもらう。

【概要】

文献調査等を含む協働作業によって、函館財務事務所の「財政教育プログラム」の問題点を洗い出すことからはじめた。そして、函館財務事務所の協力のもと、学生をグループ分けして、グループワークを行い、相互に討論することを通して「財政教育プログラム」の問題点を特定するとともに、それを解決するための具体的な内容を構想した。本プロジェクトは函館財務事務所や本通中学校と連携しながら1年間をかけて進められた。

※「地域における活動については、事前及び最中、事後に教員や函館財務事務所による入念な指導を受ける。最終的には12月の本通中学校での「財政教育プログラム」実施までにプログラムの刷新を図るものである（シラバスより）。」

【プロセスと成果】

前期では昨年の「財政教育プログラム」での模擬授業を受け、分析と解析、問題点の抽出を行った。その後、アイデアを出し合い、問題改善に向けた授業づくりを行った。また、中間発表会に向けての総括と反省、課題の洗い出し作業を行った。

後期では前期の活動の反省を行い、グループワークでの議題（模擬選挙）を設定し、模擬選挙用に架空の政党を作成、それぞれにマニフェストを設定した。その後、マニフェストの内容をブラッシュアップし、当日の授業本番に向けて内容全体の調整を行った。最終的に本通中学校で授業を行い、実施内容の振り返りと反省を行った。そして、成果報告会に向けての総括と反省、課題の洗い出し作業を行った。

【グループワークの様子】

【当日の授業の様子】

【総括と反省・今後の課題】

前期では前半の授業スライドやどのように授業を行っていくかなどの大まかな枠は決定したが、まだ発表の練習をしていなかったため細かい修正ができておらず、グループワークに向けた作業も足りなかった。後期に向けて、授業スライドの細かい修正、グループワークに向けた授業構成要素を考えることが課題として挙げられた。

後期では、当日の授業の1回目、2回目を通して内容、時間配分ともに同水準の授業を行うことができた。また、グループワークにおいて、生徒の間で活発な討論が行われ、「選挙の大切さを学ぶ」というグループワークの目的が達成されたと思われる。しかし、授業を受けた生徒から「財政についてよく分からなかった」という意見が出たことや、グループワークの際に生徒間で活発な討論が行われていた際に大学生が介入することができなかった部分があった。そのため、今後の課題として授業を行う側の技術の向上やより分かりやすい授業資料の作成、グループワークが生徒の間で活発な時に大学生が介入して相互に展開できる工夫などが挙げられた。

【地域からの評価】

「財政教育プログラム」の実践後、生徒からの反応

・これから高齢者が増えて年金、医療や介護にかかる費用が増えて多くの税金が必要となるので、限られた予算を上手く使っていくにはしっかりと計画を立てて使うべきだと思いました。
・必要とされているところにお金が行き渡るよう、税金の使い方について考えるべきだと思いました。
・政治に参加するということは、1票がすごく大事になると思いました。
・大きな政府と小さな政府に分かれて、話し合うときにそれぞれにメリット、デメリットがあり、それを配慮して考えるのが難しかったです。
・大きな政府と小さな政府にはどちらもメリットとデメリットがあって、しっかり考えて投票することが大切だと思いました。18歳になったら絶対に選挙に行こうと思いました。

などといった感想、意見があった。

【年間スケジュール】

■前期

第1回	本プロジェクトの概要説明
第2回	グループワーク
第3-4回	前年度「財政教育プログラム」の分析、解析、問題点抽出
第5-7回	授業計画案作成
第8-12回	「財政教育プログラム」プレゼンテーション作成
第13-15回	プロジェクト成果・課題中間発表会準備、実施

■後期

第1回	前期の反省、後期に向けての整理
第2-6回	授業資料の改善、グループワーク用の資料作成
第7-8回	読み原稿作成
第9-10回	リハーサル
第11回	「財政教育プログラム」実践
第12回	振り返り
第13-15回	プロジェクト成果発表会準備、実施

Project 18	地域協働専攻　地域政策グループ
	HUEレインボーはこだてプロジェクト
メンバー	［学　　生］ 山鼻　涼 ／ 齋藤　幹晃 ／ 菅林　澄花 ／ 山口　慧司 ［担当教員］ 古地　順一郎

【背景】

現代社会において、セクシュアルマイノリティの人々が抱く、生きづらさやその背景にある差別構造。

【目的】

上記の背景を踏まえた上で、学生に何ができるのかを見出すこと。

【概要】

活動の中では、セクシュアルマイノリティの人々の現状や、多様な性のあり方について知られていないのではないか？という仮説に基づき、さまざまな角度から啓発活動を行った。今年は、「表現する性」について「ドラァグ」をテーマにイベントを開催した。

【プロセスと成果】

前期は文献講読、ドキュメンタリー鑑賞、「青森インターナショナルLGBTフィルムフェスティバル」への参加、イベント「虹をはいて歩こう」の準備、夏休みには「さっぽろレインボープライド」への参加などを行った。座学や実際の運動への参加を通して、イベントに向けて自分達が何をするのかということを考えた期間であった。

後期はイベントの実施・振り返りから始まり、文献講読、2月の「レインボーはこだてシアター」に向けての準備に費やされた。前期の議論やイベントに向けた準備期間を踏まえて、実際に啓発運動に動いた学期だったといえる。

「虹をはいて歩こう」では、「表現する性」、とりわけ「ドラァグ」についてレインボーはこだてプロジェクト（ＲＨＰ）の皆さんと共に考えた。ドラァグとは過剰な男装・女装を身にまとい、「男とは…」「女とは…」といったジェンダー規範を疑い、撹乱するパフォーマンスである。ドラァグとは何かということを知るため、学生自身も身をもってドラァグを試行し、さっぽろレインボープライドに参加した。

イベント「虹をはいて歩こう」の中では、観客がドラァグに初めて接することを考え、予定していたインスピレーショントークの前に、講演者でもあるドラァグクイーン、てるまゑ・ノエビアさんにドラァグショーを披露していただいた。その後、てるまゑさんには、ドラァグとは何で、どのような歴史があるのかという点を話していただいた。最後に、てるまゑさん、本学でジェンダー論を教えられている木村育恵先生、市民団体「にじいろほっかいどう」の事務局長、国見亮佑さんの三者でトークセッションを行った。

今年度の活動の中で達成できたことは大きく二つある。一つめは、「表現する性」という、セクシュアルマイノリティのみならず全ての人に関わる包括的なテーマを設定したことである。また、「表現する性」を市民に伝える手法として「ドラァグ」を選択したが、ドラァグショーやドラァグに関わるトークなど、「ドラァグ」という概念に馴染みのない市民でもアクセスしやすいようなコンテンツを作れたことである。二つめは学生の「さっぽろレインボープライド」の参加などから、ドラァグの歴史やその論理だけではなく、実際にどのような感覚で運動と関わっているのかを身をもって知ることができたことである。

上の二つを考えると、テーマやイベント設計、イベント準備の間での学びという面で、幅を持った活動を行うことができた。

【「虹をはいて歩こう」の様子】

【「レインボーはこだてシアター」準備の様子】

【総括と反省・今後の課題】

総括として、我々は「学生は一体何ができるのか？」という問いに対して、二つの回答を出した。

一つ目は連帯することである。この連帯には二つの意味がある。セクシュアルマイノリティの人々に対して仲間であることである。それは理解したつもりでもなく、そして他人事になるわけでもない。現実に対してさまざまに学び、そして何ができるのかということに対して共に考えていくことだ。また運動において参画し、言挙げすることである。

二つ目は自由であることである。今回の活動ではドラァグを通して、表現する性とは何かということを考えた。先ほども書いたように、表現する性とは各々のプライドであり、尊厳である。そしてそれらを互いに認め合うことが互いに自由になること、自分らしくいられることにつながる。このような学びから、自他を認め、他者と共に自由になることが結論づけられる。

以上のような学びもありつつも、依然として課題は残った。主に四つ挙げられる。内容面では、ドラァグを切り口に表現する性について市民とともに考えてきたが、もっと表現ということを身近に感じてもらう余地はあった。イベントではドラァグをショーから、アカデミックな視点から切り込んだが、その先に市民にとって、どのような実践の形があるのかということまでは踏み込めなかった。また、勉強の内容も基礎知識や歴史などに留まっており、過去から現在までの弾圧の事例など、さらなる勉強の必要性を感じた。形式的なところでは、予定の見通しの甘さ、そこを原因とした準備の遅れなどがあった。

【地域からの評価】

今回は活動を共にしてくださったRHPのメンバーから評価をいただいた。以下では箇条書きで記述する。

・活動の中では楽しそうにやっていたし、熱量もあった。
・1年間という中で十分な知識は吸収できたのではないか。
・積極的に色々なところに行ったこと、ドラァグを実際にすることなどを踏まえるといい活動だった。

このように肯定的な意見をいただいたものの改善点などについても意見をいただいた。

・もう少し早めにいろんなことを決めておくと、もっと詰めたかったところを詰めることができたかもしれない。
・ある程度自立してできるところは、大人の意見を頼らずにできるようになればいい。

これらの意見はどれも活動の中で痛感しており、次年度に活かしてほしいポイントである。改めて、ご意見いただいた皆様に感謝申し上げる。

【年間スケジュール】（毎週火曜日実施）

■前期
4月：オリエンテーション
5月：ドキュメンタリー鑑賞・ディスカッション
6月：森山至貴著『LGBTを読み解く』講読
7月：「青森インターナショナルLGBTフェスティバル」
「ゲイの人と焼きピロシキをつくって食べる会」
参加

■夏休み～後期
8月：札幌すすきのへ遠征・打ち合わせ
9月：「さっぽろレインボープライド」参加
10月：「虹をはいて歩こう」開催
11月：イベント振り返り
北丸雄二著『愛と差別と友情とLGBTQ +』 講読
12月：2月のイベントに向けた準備
「ゲイの人と焼きピロシキをつくって食べる会」に
参加
1月：成果発表
2月：「レインボーはこだてシアター」を実施
活動の反省・引き継ぎ資料の作成

Project 19	地域協働専攻　地域政策グループ
	森町の特産品をかんがえて、つくって、販売する！プロジェクト ～北海道教育大学函館校　× Gスクエア　×　商舎～
メンバー	［学　　生］ 五十嵐　涼 / 一ノ瀬　太希 / 加藤　謡 / 佐藤　琉紳 / 高橋　昂大 / 南　優希 / 村上　長太郎 / 渡邊　りか
	［担当教員］ 齋藤　征人

【背景】

森町への訪問から米余り＆離れが問題となっていることがわかった。農家は在庫を抱えるリスクや、食べるのには問題ないものの品質に少し問題のあるお米は安い値段で卸してしまうという現状もあり、儲けに繋がらない。安いお米を少しでも高く売る方法はないか検討し、「スイーツ」という形で消費してもらおうと考えた。

【目的】

1. 企画構成、事前調査、実践的マーケティング手法などを学びながら商品づくりの能力を養い、学生らが同じ道南地域である「森町」をさらに元気にすると同時に、森町の地域商社「株式会社商舎」、函館コミュニティプラザ「Gスクエア」といった多方面にコミュニティを広げるために活動を行う。
2. 森町の地域課題解決のための、地域特性を生かした商品づくりを、実際に現地を視察し、地域についての情報を集めることで、地域活性化の実現手法や地域とのコミュニケーションスキルを学びながら行う。
3. 新商品開発～販売により、大学および森町の知名度向上、新商品販売による地域活性化に資する。

【概要】

参加学生は主体的なプロジェクトメンバーとして株式会社商舎が販売を予定している地域特産物を使用した新商品の【立案～プロデュース～販売】を行う。

森町に直接入り込み、地域特性、歴史、文化、産品など商品開発に必要な情報を収集し、商品づくりを行うことで、地域活性化の実現手法、地域とのコミュニケーションスキル、企画力、工程管理、実践的マーケティング手法、販売実演などの能力を獲得する。

【プロセスと成果】

前期はお米を使ったスイーツとして、シェイクを開発することが決まった。5月に森町の基本的な情報について調べ、SNSを開設。6月に実際に森町を訪問し、山本農園様を視察。マーケティングの観点からスイーツ案の作成、Gスクエアでの公開授業。7月には「つむぎ米シェイク」を作ること、そのフレーバーを決定した。

後期はシェイクの試作を繰り返し、プレ販売会を経て本番の販売会を行った。10月にシエスタ函館にて「お米のシェイク」のプレ販売会を行った。これにあたって、チラシ作りや商品名、キャッチフレーズを決定。11月にロゴを決定し、前回の意見を参考に改善して本番の販売会を実施した。12月に自分たちの考える「今後のお米のシェイク」についてのプレゼンを行った。1月にはGスクエアにて「お米のシェイクの最終形　個人の最終発表」を行い、各々の考えるお米のシェイクの展望について共有した。

【シェイクの原料となるお米を作っている山本農園様を視察している様子】

【総括と反省・今後の課題】

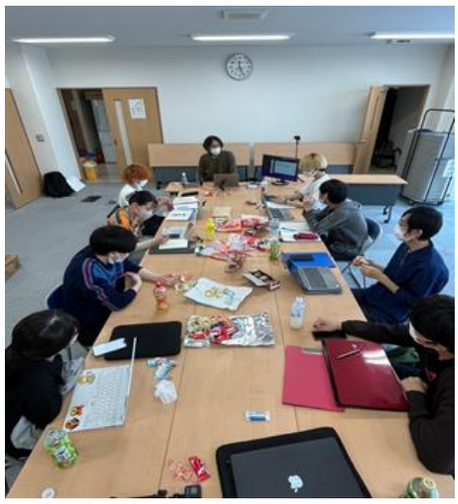
前期は、主にスイーツを何にするかについて会議やプレゼンを行い、決定するまでを行った。この一連の流れのうちで企画構成、事前調査、マーケティング手法、プレゼン力や社会人に求められている力を得られた。しかし、前期の反省点として挙げられるのは、主体性、積極性に欠ける部分があったことである。消費者は何を求めているのかをさらに考えなければならず、もっと地域住民や消費者と関わり合って、多くの人と情報を交換しながら商品を作りあげることが課題となった。

後期は、主に商品を試作しオペレーションを確立したり、販売会を通してどのようにしたら売れるのかという実践的なマーケティング力を伸ばすなどした。その後、各販売会の振り返りやこの一年を通した個人のまとめをGスクエアで発表し、全体としてのまとめを学内にて成果発表した。後期の反省として挙げられるのは、オペレーションの確立がうまくいかず、毎回作られるものにバラツキがあった。また、注文されてからのタイムラグがあること、人員配置の見直し、専用機械導入の検討、事業として成立するのか、一層の経費削減や更に販売

数を増やすことなども課題となった。

結果として、プレ販売会では1週間で68個、計23,800円の売り上げが得られた。また、本番の販売会では1週間で115個、計40,250円の売り上げが得られた。合計64,050円の売り上げのうち25,484円を、純利益として北海道教育大学函館校に寄付することとした。

こうした活動を通して、本プロジェクトの目的としていた、地域活性化の実現手法や地域とのコミュニケーションスキルを学ぶことや、企画構成、事前調査、実践的マーケティング手法などを学びながら商品づくりの能力を養っていくこと、地域活性化に資することができた。地域プロジェクトの趣旨である「地域で活躍する上で必要な実践的課題解決能力を養う」ことを、まさに表しているような活動ができているように感じた。利益が出ていることを根拠に、地域課題解決の1つの手法を学ぶことができ、その利益を学校に寄付することによって、地域、学生、大学の三者が共に得をするというモデルを構築できたことは、本プロジェクトの大きな意義であると考える。



【どのようなスイーツを製作するか
話し合っている様子】

今後の課題としては、どのようにしてさらなる利益を生み出せるか、販売する時期、場所、価格、原材料、オペレーションはどのようにするか、そして今回販売したのはプレーン味のみであったが、トッピングやフレーバーによってどのように付加価値をつけるかなどが考えられる。

【地域からの評価】

本プログラムでは地域のダメなところも、できない・難しい点もある程度は共有でき、やりたいけどできない！という弊社の弱さも学生さんと共有できました。プロジェクトチームとしてお米のシェイクを開発し、販売をするところまでたどり着けたことで、提案で終わるスタイルとは違う「地域づくりって難しい」「事業を動かすって難しい」という気づきを得たのではないかと思います。

（株式会社商舎　副社長　水山淳史　様）

●本気で学生と企業が取り組んでいるというのが素晴らしいと思いました。
●いわゆる授業で地域に入るという形を飛び越えていこうとする姿が素敵だと思いました。
●授業としてというよりは、自分たちで新商品を作るという当事者意識を感じられた発表でした！これからの展開が楽しみです！！！
●熱意が伝わってきて良かった。たしかに大学との連携は提案だけしてあとは丸投げというパターンが多いので、しっかり販売やその後の流通、改善まで考えて活動できているのは地域にとっても学生にとってもプラスになると感じた。

など（10月22日実施「プレ販売会）にて）

●高齢者や育児的ケア児への飲み物としてぜひ活用してもらいたいと思いました。
●期待を超えるおいしさだったので、期間限定なのはもったいないですね。森町の新名物になることを期待してます！

など（11月19日実施「販売会」にて）

【年間スケジュール】

前期	4月	顔合わせ 事前説明
	5月	ゴール・ミッションの確認 森町についての事前学習
	6月	森町訪問 商品開発
	7月	森町訪問 商品開発 学内中間発表
	8月	学外中間発表
後期	10月	後期の方向性の確認 発売会準備 プレ販売会及びその反省
	11月	本番販売会
	12月	本番販売会の反省
	1月	学外成果発表 学内成果発表

【謝辞】

本プロジェクトにご協力くださった、Gスクエア・岡本啓吾様、株式会社商舎・水山淳史様、山本農園様に感謝申し上げます。有難うございました。

Project	地域協働専攻　地域政策グループ
20	**後期近代の時代精神と地域内の公共的人員交通における路面電車の役割** **ーその延伸の可能性と不可能性に関する実証的考察**
メンバー	［学　　生］　村瀬　駿斗 ／ 中嶋　優翔 ／ 扇谷　奏汰 ／ 吉田　健人 ／ 菅沼　秀 ［担当教員］　田村　伊知朗

【背景】

過去の地域プロジェクトにおいて、路面電車ルネサンスを考察するために、岡山市、富山市、宇都宮市等の路面電車ルネサンスの実態を考察した。函館の路面電車を再生するための指針とするためであった。

【目的】

函館の路面電車の再生のために、可能な政策を考察するために、路面電車ルネサンスの実態を考察した。実際に利用しながら考察及び延伸案を提案する。また、その不可能性の原因を考察する。

【概要】

岡山市電の創設可能性を考察する。また、富山市電の成果を学習する。後者に関しては、すでに多くの文献の蓄積がある。最後に、函館市電の延伸可能性に関して具体的可能性を討究する。その不可能性の根拠を再検討する。

【プロセスと成果】

メンバーの多くは、市外の出身であり、路面電車を身近に感じることはなかったため、函館市の路面電車に乗ることからスタートした。乗車するだけでなく沿線を散策し、路面電車の良さや課題などを議論することで、研究の足がかりになった。

まちづくりや地域の諸課題を解決する際に路面電車、交通はどのように貢献していくのか、この1年を通して学習できた。前期において岡山市電の挫折過程と、後期において富山市電の成功事例を学習した。様々な交通政策の実体と理論を学習することによって、函館市電の意義と限界を学習した。特に、後期において函館の路面電車の延伸の具体的可能性を探究した。

1．五稜郭公園前停留所から亀田支所への延伸

2．五稜郭公園前停留所からフェリーターミナルへの延伸

3．湯の川温泉停留所から函館空港への延伸

【総括と反省・今後の課題】

中間発表で「岡山市の路面電車ルネサンス」について発表した際、実際にポスターセッションで地域の方々とお話をした時に、データや情報の調べ不足が私たちの共通の課題に挙がり、万全の準備とはいかなかったことを全体で共有した。函館市電の延伸は不可能である。この根拠は、明治以来の函館市の行政の問題とも関連するので、今後の課題としたい。

【地域からの評価】

函館市の路面電車の延伸は、不可能である。しかし、公共交通全体の位置づけのなかで、路面電車をより活用する方法を再検討する。財政的観点、とりわけその財源を考慮すべきである。とりわけ、バスとのよりスムーズな結合方式を再検討する。

【年間スケジュール】

前期	4月17日	スケジュール確認
	4月	岡山市路面電車ルネサンスの総括的討究
	5月	その観光資源
	6月	その財政
	7月	併行する道路との関連
		中間発表準備
後期	10月	富山市電の文献考察
	11月	その財政
	12月	函館の路面電車の延伸可能性
		函館の路面電車の延伸不可能性
	1月	成果発表会準備

Project	地域協働専攻　地域政策グループ
21	**QOL向上支援のための健活プロジェクト**
メンバー	［学　　生］ 清水　滉規 ／ 伊藤　佳歩 ／ 島立　理帆 ／ 別所　柚名 ／ 石岡　拳聖 ／ 佐々木　日和 ／ 加藤　さつき ／ 小橋　奏音
	［担当教員］ 外崎　紅馬

【背景】

人は様々な生活課題に囲まれて生活している。そのような中で、少しでも満足度の高い暮らしの実現に努めている。しかし、インターネット等各種媒体を通じて様々な情報が氾濫しているため、「本当に正しい情報が何か」判断が難しい。

【目的】

そこで、健康に関する正しい知識・正確な情報を地域住民に伝え、健康についての理解促進と健康増進のために行える生活行動の創出・支援を行うことを本プロジェクトの目的とする。

【概要】

健康に関する理解促進・意識啓発として下記の活動を実施する。

① 健康理解促進の絵本づくり
② 健康情報に基づいた動画作成
③ 食と栄養に関する簡単レシピの考案とその調理動画の作成

【プロセスと成果】

前期は、活動内容別に「絵本班」「動画班」「料理班」の3つのグループを立ち上げ下記の活動を行った。

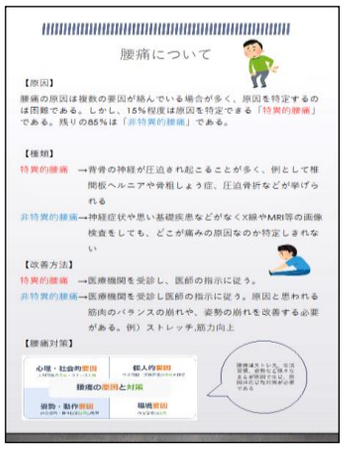
① 絵本班：絵本の原案作成・絵本づくり
② 動画班：健康情報の精査・動画撮影
③ 料理班：料理レシピの考案・調理動画撮影

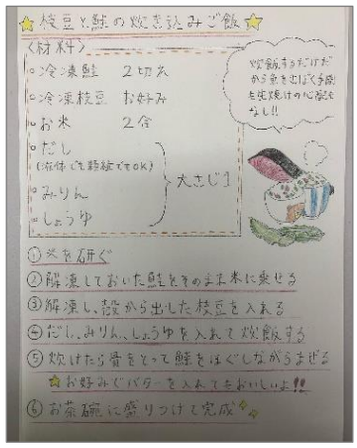
後期は、前期の内容を踏まえ下記の活動を行った。

① 絵本班：絵本の完成・閲覧
② 動画班：健康動画・健康ポスターの完成・動画配信
③ 料理班：料理レシピのポスター配布・調理動画配信

【作成した絵本】

【動画撮影の様子】





【健康情報・料理レシピのポスター】

【総括と反省・今後の課題】

前期は、活動内容別に「絵本班」「動画班」「料理班」の3つのグループを立ち上げ、①絵本の原案作成・絵本づくり、②健康情報の精査・動画撮影、③料理レシピの考案・調理動画撮影を行った。活動ツールとして絵本や動画を用いることとしたため、健康に関する情報を収集することと合わせて、絵本の特性や、動画の撮影方法等についても確認を行い、手探りではあったがひとつひとつ理解を図りながら作業をすすめた。

後期は、絵本の仕上げと閲覧、健康動画・調理動画の完成と配信、それにあわせて健康情報のポスターと料理レシピのポスターを作成し配布を行った。情報の発信方法を、絵本や料理レシピのポスターなどの紙媒体と、SNSを利用した動画配信などによる通信情報媒体を利用することにより、子どもから若者、ネットになじみの少ないシニアなど各層に向けて、健康に関する情報の提供を実施できた。

今後、健康を意識したより良い生活行動を維持していくための方法について検討することが課題である。

【地域からの評価】

●絵本班
- ・今の時代の問題点や悩みを題材にしている
- ・手作り感がかわいらしい
- ・クイズ形式が子供たちにわかりやすい
- ・ストーリーが良かった

●動画班

1. 動画
- ・短い動画で飽きずに見ることが出来た
- ・身近にできることだったので、取り組みやすそうだった

2. 健康ポスター
- ・健康に関する知識が一目でわかった
- ・必要なことが明確に書かれていて、わかりやすかった

●料理班
- ・魚料理へのハードルが下がった
- ・シンプルなレシピが良い
- ・難しい食材がなく取り組みやすい
- ・手の込んだことをしなくてもおいしそう
- ・これを参考に料理に挑戦したいと思った
- ・編集・カメラアングルが良い

【年間スケジュール】

●前期

4月：活動内容の検討
5月～6月：健康情報の収集・精査
7月：健康情報の整理
　　絵本・動画・調理レシピ内容の検討
　　各班のプロジェクト進行

●後期

10月：絵本作成・健康動画撮影・料理動画撮影
11月：絵本完成・健康動画及び料理動画撮影・編集
12月：絵本閲覧・健康動画及び料理動画撮影・編集
　　健康ポスター・料理レシピポスター作成
1月：絵本閲覧・健康動画及び料理動画配信
　　健康ポスター・料理レシピポスター作成配布

Project 22	地域協働専攻　地域政策グループ
	子どものことを考えた地域をつくる！ ～チャイルドファーストな地域づくり～
メンバー	［学　　生］　福田　誠也 ／ 天野　ほのか ／ 飯野　遼也 ／ 黒川　梨々花 ／ 佐藤　星歌 ／ 関根　朱音 ／　髙橋　佑奈 ／ 高橋　洋平 ／ 藤嶌　梨乃 ／ 宮内　健塁
	［担当教員］　中村　直樹

【背景】

地域コーディネーターの方から「地域」と「子ども」を繋ぐことが困難であるという課題を抱えているという話をいただき、子どもたちと地域を繋ぐための架け橋が必要だと考えた。

【目的】

地域の人とのコミュニケーションや子どもたちの行動の手助けや補助を通して、学生たちが地域と子どもたちを繋ぐ架け橋となって、子どもの学び・挑戦を促進する。

【概要】

・地域コーディネーターの方と連携して、「地域」と「子ども」を結びつける。
・函館の街を学びの場として、地域で活動する。
・活動の際、交流を通して「子ども」たちの学びの挑戦を手助けする。

【プロセスと成果】

前期は私たちのプロジェクトの基盤となる、「子ども」についての調査を行った。しかし、コロナ禍などの理由から実践的な活動ができないでいた。そこで、後期は、実践的な活動を行うと決め、地域の団体と連携しながら地域での活動に力を入れた。

●「フリースクールすまいる　クリスマス会」

・学生が地域と子どもを繋ぐ架け橋となって、すまいるの子どもたちの居場所を広げ、地域への愛着を育むために、クリスマス会を企画した。3週間ほど前から複数回すまいるに訪問し、買い出し・たこ焼きパーティー・ドームケーキ作り・プレゼント交換についての打ち合わせを行った。またその中で、クリスマス会が終わった後も、子どもたち自身や家族と一緒に見返せるように、お知らせプリントとドームケーキのレシピを作成した。
・買い出しや調理などの共同作業における活発なコミュニケーションの中で、子どもたちが地域への愛着を再確認する機会を提供することができたと思う。普段なかなか交わらない大学生と子どもたちとの双方向の交流によって、思い出に残る楽しい会になった。

●「子どもたちとのスノードームづくり」

・学童から大学生とイベントをしたいという依頼をいただき、冬の時期に形に残る思い出作りをしたいという思いから、スノードーム作りの計画を始めた。12月の初めに試作品を作り、水漏れやラメが多い等の失敗を経験した。何か所もお店を回り、必要なものの買い出しや試作品づくりを繰り返した。子供たちが理解しやすいように工夫をした「スノードームのつくりかた」を作成した。1月13日学童でスノードーム作りを実施した。普段関わらない大学生と一緒にもの作りをしたという普段できない経験を通して、形の残る楽しい思い出作りをすることができた。ものを作るだけでなく、子供たちも積極的に会話をしてくれて、楽しんでいる様子がみられた。

●「子どもたちとの大学見学」

・後期の活動の一つとして、子どもたちを大学に招待して、①大学見学を兼ねた宝さがしゲーム　②子ども達と学生が一緒に学食を食べる　③体育館でレクリエーションを行った。
・私たちは、学生が主体となって子ども達が地域に愛着を持ち、居場所を広げる役割を果たすという目標を立てた。そのためにまずは大学という場所に興味を持ってもらい、子供たちと学生が協働できるような活動を行いたいと考えこの企画を立案させた。その成果として、学生が計画していたことを子どもたちと協働して活動することができ、子どもたち、学生ともに有意義で楽しい時間を過ごすことが出来た。

【スノードームづくりの様子】

【クリスマス会の様子】

【総括と反省・今後の課題】

前期は地域に出ての活動ができず、行動力と計画性の面で反省が残った。しかし、後期は様々な団体と連携して、子どもと地域を繋ぐ架け橋となるようなプロジェクトをすることができた。

●「フリースクールすまいる　クリスマス会」：後期の活動の中で実施が決まり、急遽、計画・実行することとなった。そのため、臨機応変な対応が難しく、準備期間や会場設営などについて余裕を持った行動ができなかったという課題が残った。また、子どもたちの作業を学生がどこまで手伝うのかという線引きについても、細かな部分まで考慮しきれなかったという点から、今後はどのように子どもたちと関わっていくのか、安全性を確保しつつも子どもたちの自主性を育むことができる形を模索する必要があると感じた。本プロジェクトにおける、すまいるへの複数回の訪問や前日・当日の共同作業を通して、子どもたちと学生の双方向の交流ができ、思い出に残る楽しい会になったと共に、子どもたちの創造性を育むきっかけにもなったと考えた。さらに今回は、買い出しも活動の一環としたことで、子ども達の地域に対しての愛着を再確認すること、学生とのさらなるコミュニケーションをとることも可能になったと考えた。

●「スノードームづくり」：学童に通う児童とのスノードーム作りの活動では、小学生と大学生という日頃はあまり関わらない世代間での交流という目的に沿って、一緒に“もの作りをした”という普段できない経験を通し、形の残る楽しい思い出作りをすることができた。子供たちも積極的に会話をしてくれて、楽しんでいる様子がみられた。反省としては学童側との直接の打ち合わせが当日の朝になってしまったことと、事前に学童を訪れ児童との交流を図れなかったことである。事前に交流をすることができていれば、当日さらに深い交流ができたのではないかと感じる。

●「子どもたちとの大学見学」：当初から計画していた事がスムーズにでき、子ども達、学生ともに有意義で楽しい時間を過ごすことが出来た。しかし、逆に時間が余ってしまい30分ほど待機時間を作ってしまった。今後の課題としては、この地域プロジェクトの活動が終了した後でも、継続的な関係を続けるということが挙げられた。

【地域からの評価】

●ひだまりクラブ足立先生より「普段かかわることのできない地域の大学生と交流ができ、楽しかった。今後も定期的な交流が開きたい」と感想をいただいた。

●フリースクールすまいる越智さん：短い期間での、計画準備は大変だったと思いますが怪我等なく終われて安心しました。計画準備はもう少し早めに始められるとよかったのかなと思います。当日までの過程で買い物も一緒に行けた事は子ども達にも「クリスマス会で何を作るのか」のイメージが付きやすく実施できてよかったと思います。ボランティアに来られる頻度にバラつきはありましたが当日は積極的に子ども達と関わってくれようとする姿が見られて嬉しかったです。子ども達の特性や信頼関係を構築するまでには至らなかった部分はあるとは思いますが今後も関わっていってくれると子どもたちも喜ぶと思います。

【年間スケジュール】

■前期

4月～5月　若者問題についての話し合い
6月　子ども食堂の調査
（函館の子ども食堂に電話やメールで調査）
7月　活動内容の最終確認

■後期

10月～11月　活動準備
12月初旬　最終調整
12月22日　「フリースクールすまいるクリスマス会」
1月13日　「学童保育ひだまりクラブ
スノードームづくり」
1月19日　「子どもたちと大学見学」

Project	地域協働専攻　地域政策グループ
23	**道南地域くらし応援プロジェクト（MIMIZ編集室）**
メンバー	［学　　生］ 佐藤　ことほ ／ 宮田　沙耶花 ／ 柴田　圭介 ／ 高橋　佳大 ／ 田村　健人 ／ 堂前　隆成 ／ 松山　壮太 ／ 水口　花音 ／ 山内　あかり ／ 吉田　実緒
	［担当教員］ 畠山　大 ／ 藤井　麻由

【背景】

ミニコミ誌「MIMIZ」の発行を通じて、地域における学生や若者とミドル・シニアとの交流・協働を活性化し、ひいては、若者の地域における就業・起業・定住を促進することに貢献する。

【目的】

①現場に密着して地域を見る、②物事を掘り下げて見る、③「土」（＝地域）を作り、地域の「土」となる人材を育成する、④自分たち自身が地域にとって有為な人材となることを目指す、⑤いつも前向きである。

【概要】

函館の中で、特に雑誌の記事として取り上げるべきものを大学生の視点で探し、それを記事にして多くの人に読んでいただくことで函館地域の活性化への貢献を目指す。

【プロセスと成果】

前期は電子版のみの発行を目標にし、自分たちの興味のある分野から様々な場所への取材を行った。また連絡手段としてSlackを活用し、意見交換を行っていった。だが前期の反省点として、全員での話し合いの場での消極的な姿勢が挙げられ、前期の編集長の負担が大きくなってしまった。取材に関しては各自様々な方法を駆使して、アポ取りや取材を進めていった。大多数が雑誌作りというものが初めての経験であったため、試行錯誤を何度も繰り返しながらも無事に発行することができた。また発行してからはGoogleフォームでのアンケートを用いて、読んでいただいた人たちの声を集めようと試みたが、届いたアンケートの回答は少なく、周知活動も課題として見えた。

後期は前期の反省をもとに電子版と紙版での発行を目標とした。紙版での発行は留意点が多くあるため、後期の活動は前期よりも全体的に前倒しで進んでいった。前期と同じように各自取材を進めていったが、一度経験したことで少し慣れることができたため、前期よりも円滑にアポ取りなどを終えることができた。また話し合いの場でも前期の反省を踏まえ、積極的に発言しようという姿勢は増えていったが、活動が終わってみると、前期同様、編集長の負担がまだ大きくなってしまっていたのは大きな反省点として挙げられる。またTwitterやInstagramでの周知活動にも力を入れることができ、より多くの人にMIMIZの活動を知ってもらえるようになっていったと感じている。だが、Instagramの更新の際の写真不足が挙げられ、各々が全体のことを意識して活動していかなければならないという反省もあった。

【MIMIZメンバーの写真】

【総括と反省・今後の課題】

総括として、このMIMIZの発行は、学生にとってとても有意義な活動であったと思う。それは、雑誌作りという観点のみならず、地域での様々な取り組みに関して取材を通して知ることができたり、自分たちの興味をもっと掘り下げることで、普段知ることができないであろうことを知ることができたりと、様々な経験をすることができた。また各々Wordを駆使しながら見やすいデザインを考えたり、見ている人にわかりやすい文章を考えたりなど、「見てもらう」という意識のもと活動したことによって、より外向的な視点を持つことができたのではないかと思う。加えて地域にとってもMIMIZを前期・後期ともに発行したことによって、様々な活動や、考えなどに対する関心を高めるきっかけの一端を担うことが出来たのではないかと思う。

だが同時に反省点も多くあり、締め切りがどんどん先延ばしになる、先ほども挙げたように編集長の負担が大きくなってしまう、など多くあった。これに関しては個人での作業が多くなってしまう活動であるからこそ、MIMIZという雑誌をみんなで作り上げるという意識が少し薄れてしまったことが原因であると考える。全員が雑誌の発行に向けて一つの方向へと向かうことで、話し合いの場での発言も多くなっていくだろうし、困っていたらSlackを用いて聞くことができたと思うので、全体での意識の統一というのは今後の課題になっていくのではないか。

【地域からの評価】

取材先からいただいた声として、「何気ない会話を言語化してくれてうれしかった」というものがあったように、地域の人たちが普段考えているようなことを、MIMIZの発行によって発信することができていた。またアンケートからも今まで見てもらえなかった年齢層の方たちにも読んでいただいていて、今後の活動にいかせる意見を得ることができた。

成果報告会では、「学生目線だからこそ見える函館を発信していてとても見応えがありました」という声があり、自分たちが既存の雑誌にはない強みを生かすことができていたのだと実感することができた。

【謝辞】

最後に、MIMIZを発行するにあたってご協力いただいた多くの方々、読んでいただいた方々に感謝を申し上げるとともに、今後の活動に関してもご協力の程よろしくお願いいたします。

【年間スケジュール】

■前期

4月 7日　第 1回「オリエンテーション」
4月14日　第 2回「テーマについて議論」
4月21日　第 3回「企画絞り込み」
4月28日　第 4回「取材準備」
5月12日　第 5回「個人のデザインについて議論」
5月19日　第 6回「表紙・裏表紙について議論」
5月26日　第 7回「サブタイトル決定」
6月 2日　第 8回「フィードバックについて議論」
6月 9日　第 9回「表紙決定」
6月16日　第10回「各自原稿完成」
6月23日　第11回「原稿の確認・校正」
6月30日　第12回「編集後記作成」
7月 7日　第13回「最終確認」
7月14日　第14回「8号完成」
7月21日　第15回「予備日」

■後期

10月 6日　第 1回「活動開始・各役職決め」
10月13日　第 2回「雑誌の構成決め」
10月20日　第 3回「タイトル決定」
10月27日　第 4回「表紙決定」
11月10日　第 5回「各自取材準備」
11月17日　第 6回「取材開始」
11月24日　第 7回「プレスリリースの確認」
12月 1日　第 8回「取材記事以外のページの確認」
12月 8日　第 9回「各自記事作成開始」
12月15日　第10回「各デザインの確認」
12月22日　第11回「雑誌の設置場所確認」
1月 5日　第12回「仮の記事完成」
1月12日　第13回「各自記事確認・校正」
1月19日　第14回「入稿前最終確認」
1月26日　第15回「通しゲラ完成」

Project 24	地域協働専攻　地域政策グループ
	障害のある人の地域生活支援プロジェクト ―NPO法人自立の風かんばすとの連携―
メンバー	［学　　生］ 浅利　由紀 ／ 川浪　結衣 ／ 照井　菜月 ／ 中村　有汰 ／ 本間　拓人 ／ 三春　紅華 ／ 吉田　一花 ／ 渡部　芽衣子
	［担当教員］ 廣畑　圭介

【背景】

現代社会において、障害者が親元や施設で暮らすことを当然と考える当事者や、当事者以外の人もそのような考えを持った人が多く存在する。一方で、地域での自立生活を考える障害者も数多く存在する。

【目的】

本地域プロジェクトの目的は以下の4点である。

① 「NPO法人自立の風かんばす」の活動に関わり、実践を通してかんばすの目的や活動内容を理解する。
② 函館市における社会福祉の現状と課題を理解する。
③ 障害のある人との交流を通して、障害のある人への理解を深める。
④ 函館市の障害者福祉の推進への貢献を図る。

【概要】

2005年から函館市内を中心に、障害のある人への理解についての普及啓発活動、障害のある人の地域生活（自立生活）の支援活動を行っている「NPO法人自立の風かんばす」の活動に参画して、活動の実態や社会福祉における地域課題を理解し、函館市の障害者福祉を推進するプロジェクトである。「NPO法人自立の風かんばす」は、障害があっても地域社会で自分らしく生きることができるように自立生活を支援し、またそれが当たり前にできる豊かな社会を目指している団体である。

【プロセスと成果】

1年間で主に以下の5つの活動を行った。

1. かんばすへの訪問と日々の活動への参加

食事の作り置きを行う「かんばす食堂」の手伝いやかんばすの通信である「小石」の製本、ドット看板づくりといった活動に参加した。

2. LINEオープンチャットでの検温活動

毎日の体温とコメントをノートに記入する活動である。週ごとに担当者を決め、ノートの作成や協力の呼びかけなどを行った。前・後期で16週担当した。

3. 市内の高校・専門学校への「小石」やポスターの配布

地域の人にかんばすを知ってもらうために立案した。8人で手分けして8校へ配布した。

4. コミュニケーション交流会の開催

かんばすの方々との仲を深めるための交流会を前期に開催した。地域プロジェクトメンバーが計画し、バーベキューと体育館でのミニゲームを行った。

5. Instagramを利用した発信

学生の目線からかんばすでの活動の様子を発信した。1年間で12回投稿を行った。

【活動中の全体写真】

5つの活動についてそれぞれ次のような成果をあげることができた。

①コミュニケーションを図る機会となり、かんばすの活動について理解を深めることができた。
②体温の記録により感染予防を図るとともに、コメントを通してかんばすの方々との交流ができた。
③「小石」やポスターの配布、それに関わる説明を通して、地域の人にかんばすを知ってもらう機会を増やすことができた。
④かんばすの方と話し合いを重ね、全員が参加できる企画を実施した。楽しい時間を過ごすことができたという声を頂いた。
⑤投稿のために感想や学びを言語化できた。Instagramを通じて様々な人から反応を頂いた。

【総括と反省・今後の課題】

前期では、メンバーそれぞれがかんばすの皆さんとどのように接していけば良いのか悩んでしまったことで距離を縮められなかったことが反省点であった。

後期ではその反省に立って、かんばすの皆さんと日常会話を心がけたことや、会話をする機会を増やしたことで関係を深めることができた。このような取り組みから、積極的なコミュニケーションを取ることが「障害」のある人への理解を深めることができる一つの手段だと気づき、またそのコミュニケーションにおいては、それまで無意識にも「障害」によって対応に区別や差をつけていたことに気づき、「障害」のある・ないで接し方を変える必要はなく、人と人との関係、対等な関係でいることが大切だと学んだ。

活動を通しての変化は、これまで障害者福祉は施設において一方的に支援が行われるものと考えていたことや、「障害」に対してのマイナスなイメージが以下のように変わったことである。かんばすでの活動に参画し、地域の中での支え合いの実践が行われていること、またメンバーの温かさを感じたことで、その一方的な考えやマイナスなものはなくなり、（心身の）「障害」があることが生活に問題をもたせるものではないという考えに至った。また、かんばすの方々は、（心身の）「障害」に対してマイナスなイメージを持っておらず、自らが生活に楽しさを見出していることに気がついた。

課題としては、周辺地域の住民に対してかんばすを周知する直接的な活動が十分に出来たとはいえず、周辺地域の住民の理解促進が十分に図れなかったこと、かんばすと若年層との交流が少ないことである。今後も学生とかんばすが連携し、周辺地域の住民や若年層との交流を促進する必要があり、その際は特に若年層に興味を示してもらえる機会の設定や周知の方法を工夫していく必要があることが見えてきた。

【地域からの評価】

若年層が講演会にほぼいないとのことだったが、ポスターを貼ったり、Instagramで情報を発信したりするなど何でお知らせしたら来るか、ではなくどういう情報を載せたら興味を持ってもらえるかで考えればもっと活発なプロジェクトになるのではないかという意見があった。

障害のある方たちと真摯に向き合い、多くの学びを得たのだなということが伝わり、「障害」理解だけにとどまらず、地域の抱える具体的な課題も見えていて素晴らしいという意見があった。

障害者に対して差別をしてはならず、理解を示すことが大切なのだと思っていたが、ただ触れないで褒めてあげるという姿勢はあってはならないことだと初めて知り、理解しているつもりでも間接的に差別をしているように感じられてしまうことに気をつけたいという意見があった。

高校に小石とポスターを配布した際、かんばすとしては初めての試みであったが、快くお話を受けていただき掲示していただけた。また2回目も同様に掲示をしていただけたことから、私たちの活動に理解を示してもらい意味のある活動として良い評価をいただけたのではないかと考えられる。

当該プロジェクトの連携協力先である「NPO法人自立の風かんばす」のメンバーから、学生が主体となってやりたい活動の提案や意見を言ってくれて本当にありがたいという評価を受けた。

【年間スケジュール】

2022年4月
- ・授業の説明
  →かんばすのLINEオープンチャット加盟

2022年5月
- ・顔合わせ(自己紹介・活動内容の説明)
- ・活動についての話し合い

2022年6月
- ・小石の紙折り(製本作業)、
- ・廣畑地プロ“Instagram”開設
- ・コミュニケーション交流会についての企画の話し合い

2022年7月
- ・コミュニケーション交流会(BBQや交流企画)
- ・市内の高校・専門学校に小石と轍配布(8校分)
- ・かぶさん家訪問

2022年10月
- ・高校への小石配布(8校分)
- ・講演会への参加
  （会場設置の手伝い、動画の視聴）

2022年11月
- ・かんばす食堂と事務作業の手伝い
- ・蔦屋書店でお使い
- ・検温活動の実施(12月末まで)

2022年12月
- ・ドットのパネルを入れ替え
- ・Zoomで自立ステーション「つばさ」のクリスマス会に参加

Project	地域協働専攻　地域政策グループ
25	**外国人の就労と定住を支援するプロジェクト(&U Project)**
メンバー	［学　　生］　大平　彩 ／ 木村　紘 ／ 髙橋　心愛 ／ 渡邉　はるか ［担当教員］　森谷　康文　［アドバイザー］　中小企業家同友会政策委員会委員長　河村　悦郎

【背景】

近年、函館市は人口減少の一途をたどっており、域内需要の縮小や労働力不足などをもたらすことが懸念される。こうした状況を反映して、函館はもちろん日本国内では外国人技能実習生の受け入れが増加している。一方、外国人技能実習制度は、安価な労働力・雇用の調整弁となっているなどの批判もあり、単なる安価な労働力の確保ではなく、共にまちづくりをすすめ企業を担っていく「人財」として外国人を受け入れていくことが求められている。

【目的】

函館市内の中小企業における外国人雇用を促進していくことが＆U Projectの第一の目的であった。しかし、就労で苦労している外国人の話を聞き、また日本語や文化的背景が異なることを不安に感じ雇用をためらう企業も少なくないことが見えてきた。そこで、最初から外国人の雇用を提案するのではなく、「職業体験」の段階を踏んで雇用をすることを検討してもらうプログラムを提案することとした。

【概要】

企業に雇用してもらうことを想定した「職業体験プログラム」の実施を計画した。プログラムの構築にむけて、函館に在住している外国人からの就労に関する聞き取りや外国人を雇用している企業への取材、障害者向けの就労支援を行っている企業での就労支援体験を行い、企業側に「外国人の職業体験」に興味を持ってもらえるプレゼンテーション資料を作成した。

【プロセスと成果】

はじめに、函館での生活をはじめたばかりの外国人の日本語の学習支援や宗教行事に参加して、就労にむけての様子を聞き、困難や課題の把握に努めた。就きたい仕事やアルバイトでの経験を聞き取り、どのような職業体験を実施すれば対象の就職につなげていけるかを検討した。対象者と接する際には、「被支援者」と「支援者」という壁をできるだけなくすよう信頼関係の構築を心がけた。

次に、函館周辺で外国人の雇用経験がある中小企業(池田工業株式会社)を訪問し、外国人を雇用することになった経緯や、雇用するにあたって特に配慮していた点、雇用した外国人の勤務の様子について取材をした。道南地域の人口減少に伴う地域の担い手不足が生じており、池田社長は池田工業への若い求職者も少なくなってきていることを危惧していた。そこで、会社を担っていく人材として外国人の可能性を検討し、外国人を継続的に採用する基盤を整えるために、約2年前にはじめて外国人を雇用している。昨年も新たに1名の外国人を採用している。池田工業では、外国人を雇用することで、社員の多くが外国人社員に対して日本語を教えたり、優しく接したりすることで、社内の雰囲気がよくなったという。また、実際に外国人を雇用したことで、外国人に安全面や仕事を教える手順が社内で構築できたという話を聞け、これらを企業へのプレゼンテーションに活かすことができた。

＆U Projectは、当初、企業に対して最初から外国人の雇用を提案することを想定していた。しかし、中小企業の事業主や社員と話しをするなかで、少なくない中小企業が外国人を雇用することは想像できず、不安があることが感じられた。そこで、学生が外国人に付き添って「職業体験」をすることで、企業側に外国人の働く姿勢を見てもらうことが効果的ではないかと考えた。そして、学生によるサポートのヒントを得るために、障害者就労支援施設(ジョブシード)に伺い、就労支援を体験し、支援者はどのような工夫を行っているかを学んだ。「外国人の就労支援」と「障害者の就労支援」の共通点として、支援者(学生)が業務を熟知していること、その上で業務を教える際に工夫できることがあれば準備しておくこと、支援者(学生)に周囲を見る力が求められること、日本人しかいない職場で職業体験をおこなうことは外国人にとって不安であるため、利用者の外国人が困っていないかよく様子を見てサポートをおこなう必要があることなどのヒントが得られた。

12月には、J-ILA(日本国際語学アカデミー函館校)の学生との交流会を行い、将来の希望やアルバイトでの不安に感じた点などを聞いた。実際に日本で働いた経験を聞き、今後の就労支援につなげられることがあった。

こうして、「外国人」と「企業」の両方の視点から、外国人就労に向けて活動してきた。実際に、企業に対して職業体験の依頼をするまでには至らなかったものの、中小企業家同友会函館支部の政策委員長河村さんのご尽力のもと、同友会定例会の場で企業向けに作成した「職業体験を依頼するプレゼンテーション」を行った。そこで指摘された意見からスライドの内容や発表の仕方を改善するとともに、来年度の＆U Projectメンバーが活用するものとして、「外国人就労支援パンフレット」を作成し、今年度の活動を終えた。

J-ILA 交流会の様子

ジョブシードにて職業体験をする様子

【総括と反省・今後の課題】

前期は、主な活動として企業に向けた外国人の職業体験の依頼作成をおこなった。また、北海道教育大学函館校で実施されていた外国籍の子どもたちの日本語学習支援に参加し、そこで就労を希望している者（17歳）との交流を図ることや、外国人雇用経験のある企業への取材もおこなった。さらに、北海道中小企業家同友会函館支部の政策委員会にも参加し、企業の外国人雇用にかかわる意識を把握した。これらを集約し、外国人の「職業体験」プログラムの検討を開始することができた点が最大の成果であったと考える。

後期は、障害者就労支援施設(ジョブシード)を訪問し、支援員から就労支援の在り方や効果的な就労支援の方法について学ぶことができた。J-ILA日本国際語学アカデミー函館校の留学生とも交流し、外国人が日本でどのようなキャリアを形成しようと考えているのか、外国人が日本で就労するにあたってどのような支援を求めているのかについて学ぶことができた。今年度の活動を今後も継続するべく、今後のプロジェクトや企業向けの資料も作成した。

一方で、「職業体験プログラム」は実際におこなうことができず、外国人と企業を結びつけるという目標は達成することができなかった。今後の課題として、今年度の活動で企画した外国人の職業体験を実行に移し、外国人を雇用に結びつけることが求められる。

【地域からの評価】

2021年の出生数が81万人を割り込むという、データが存在する1899年以降で過去最低の数字を叩き出している昨今、渡島管内の中小企業にとっては単純な労働力不足に留まらず、企業の中核となる「人財不足」も深刻な状況にある。経営の神様と讃えられた松下幸之助が折に触れて「企業とは人なり」と説いていたことを深く心に刻み込んでいる経営者も多いが、2022年は「ヒト、モノ、カネ、情報」という伝統的な経営資源の中でも「ヒト」が差別化要因＝強みになる時代の真只中であった。

弊社で雇用する外国人の子息の就労支援を学生が行ったことは、地域の中小企業と大学が協力し、困難な外部環境を経営戦略上の「機会」と捉えることのできる可能性を示してくれた。

この国の新しい外国人雇用の在り方にとって貴重な示唆を頂いたことに大変感謝している。

（中小企業家同友会函館支部
政策委員長　河村　悦郎　様）

【年間スケジュール】（毎週木曜日定例会議）

■前期

7月-9月　日本語学習支援
4月　函館在住アフガニスタン一家の宗教行事
　（ラマダン・イフタール)に参加
5月23日　パキスタン出身者の飲食店開業に向けた
　相談に同席
6月14日　中小企業家同友会政策委員会
7月11日　池田工業取材
7月19日　中小企業家同友会政策委員会
　職業体験の依頼資料作成
　中間発表準備

■後期

9月26日，10月14日，11月10日
　障害者就労支援施設(ジョブシード)訪問
12月23日　J-ILA(日本語学校)留学生との交流会
　後輩向け外国人就労支援のガイドブック作成
　成果発表準備